

## 明号作戦

### 仏印の想い出

長野県 吉田盛男

一 フランス軍を奇襲攻撃一

昭和二十年三月十日夜、十二時を期して我々日本軍は極秘行動のため、二日ないし三日前より行動を起した。

各隊はそれぞれ命令を受けた目的地に向かって完全軍装をして（演習に行くような格好で）出発する。これはフランス軍を奇襲攻撃するための極秘行動であった。各中隊ごとに極秘裡に出發して、目的地に向かう。我々第十中隊は敵機械化部隊の存在するトンの町を一部砲兵、工兵、輜重の混成部隊で攻撃の予定である。

三月八日、九日の行動はフランス軍の騎馬隊や歩兵隊に時々会ったが、知らん顔をして平然と過ぎ去って行く。また、昼食は林の中で飯盒炊きをして、なる

べく敵にさとられないようにして食べる。しかし、フランス軍も多少は疑問に思ったことだろうと思われてか、我々の上空を小型飛行機が飛び回って消えてゆく。このとき、各中隊ごとの行動なので、我々休憩中に北山出身の北沢兵長が声をかけてくれた。お互いに「無事で帰れたら家族の者によりしく伝えてくれ」と言い合った。再び生きて帰れるとは思われない心境であった。

この北沢さんは後日、仏支国境のマロニのトーチカ陣地攻撃の折、右足首を撃たれ、すね下切断の重傷を負ったのであるが、後日復員の折、私が先に家を訪ね、負傷のことを全然知らなかった家族にその様子を知らせたことがあった。

二日間の連日の行軍で疲れ、眠気が強く、ついには行軍中も意識モウロウとして歩いており、指揮官の「休憩」の号令と同時に倒れるように銃を持ったままゴロ寝してしまった。わずか十分間の休憩に、十一分かつ二分眠った、と後日思い出話に語ったことが忘れられなく思い出される。

攻撃の目的地に近づくにつれて、道路を進んだのでは早く敵に感づかれるので、道無き道を最短距離で進むことになり、人がやっと通れる橋で竹を二本延棒に結わえ、しかも「ゆらゆら」ゆれる橋を渡って進む。

約二十メートルぐらいの長さがあり、しかも下の川の流れは渦をまいた急流である。もし落ちたら絶体絶命である。最端部は二尺ぐらい空いており、完全軍装の体ではやっこの思いで飛び越せるような状態であった。工兵隊の作った仮橋とはいえ全く簡単なものではあり、我々は思い切り力を入れてやっこの思いで飛び越すことができる。しかしMG中隊は機関銃を分解輸送して、片手で担いで、他の片手で渡って、向う岸へも片手で飛び越している。しかし、皆命がけでやったため事故は一人もなかったらしい。

我々一般兵士の荷物は大体弾薬百二十発、榴弾一発、背のう、銃・剣・鉄帽など少なくとも四十キロ近い重さである。ようやく各難所を通過し、トンの町に突入する。心配したトンの町の攻撃は夜明けと同時にほとんど一段落し、午前中市内を警戒して歩くと、各所に砲

兵隊の攻撃のためか集団になってフランス兵が倒れており、また一人、二人と倒れているのも見受けられる。残っていたフランス兵が手を挙げて降伏してくるのも見受けられる。このときは初年兵が勇ましく剣を突き付ければ、フランス兵は足げりをするような格好を見せたりする。

このとき第一番に突入した第三MG中隊の下士官上がりで先日少尉になったばかりの森少尉は、フランス軍婦人にピストルで撃たれ戦死してしまう。あつという間の出来事だった。戦争を初めて経験して、中隊長の命令で死骸の転がっている、熱気で悪臭がぶんぶんする中で「昼食」という指示があったが、我々初戦の経験しかない者は少しも食べられなかった。しかし五、六年兵は悠々として食べていた。さすがに戦争の経験者らは違ふものだとつくづく感銘する。しかし皆こように昼食はとられなかったが、夕方まで何ら支障なく行動することができる。

このとき一回、自分が分哨長につく。我々にはほとんど被害はなく無事任務を終わることができた。我々

は次期命令の出るまでここトンの町で一日泊まり待機する。フランス軍の兵舎の中は我々日本軍に比べれば想像もつかないような贅沢な暮らしで、個人の裕福な民家のような生活状態であるように思われた。このとき、第三機関銃中隊長の士官学校出の太田大尉は、戦利品の大きな「オートバイ」を自由に乗り回して、当時としてはとても考えられぬこと故、我々一同はびつくりしてこれを眺めている。

いよいよ命令が下り、我々もフランス軍の追撃戦で仏支国境へ向かうことになり、ベツトリの渡河をして国境に向かう。我が小隊は渡河援護と共に最後尾の後衛小隊となり、ある程度のクーリーを使って食糧輸送の警備も行うこととなる。小隊長は岡本曹長である。この川は有名なリンコイ川である。この川の堤防で大隊の渡河援護のため、一晚中戦闘態勢をとり、最後に渡河して本部で準備してあったクーリーの臨時輜重と共に部隊の最後尾を前進することになる。

クーリーはもちろん、我々の大部分は馬を扱う経験もなく、大変な苦勞をしてやつとの思いで前進して行

けるようになる。このとき尖兵の路上斥候長で行った第二大隊の下士候隊同期の高山軍曹（戦死して一階級上進）以下ほとんど全滅してしまう。イエンバイからラオガイ（国境の町）まで小隊の連絡係下士官として毎日、本部まで命令受領に行き、小隊長各分隊長に報告する。明るい内に着くときは苦はなかったが夜遅く着くとみんな寝ており、命令係將校を不寝番から起こしてもらい、命令を受けてくれるのは容易なことではなかった。すぐまた小隊へ帰っても報告しなければならず、毎晩四時間前後しか眠れなかったと記憶している。

しかし、この行軍はクーリーも次第に馬になれ、使えなくなり、行軍にも大分慣れてきてスムーズにできるようになってきた。しかし一番いけないことは上官よりの伝達事項、特に休憩、出発が同時に伝わり、我々後衛小隊は馬の手入れに必死になっていれば、手を洗う間もなく、食べ物丸飲み込みで出発するという毎日であった。とくに雨の降る日はろくに整備をすることもなく、仮小屋でただ毛布をかぶって寝るだけであ

った。

我々下士官は自分のことだけで済むが、兵は食事、その他目の回るような忙しさの連続であった。それから大きな峠のソーレーシャバーを越えるときは、弁当は食べたが、夕食、朝食ぬきで、ドシャ降りの中を一晚中歩き通して行く。すぐ前を歩いていた機関銃中隊の頭の馬は足をすべらし五メートルぐらいがけ下へ落ちて、馬は駄目になり、その機関銃中隊では機関銃を分解搬送して、大分遅れて次の休憩地に着いたという。我々はすぐ続いて歩いてしたが、全く手の出しようもない。機関銃中隊の出来事だが、朝八時ころ我々最後尾の方で歩いて行くと、急に同村出身の伊藤衛生兵長と他の衛生兵二人がおり、ほんの少しの気付け葉をもらい「後わずかだから頑張って行け」と言われ、重い足も急に軽くなったような感じになる。

次の宿泊地はソーレーシャバーで一泊の予定と聞かされ、しかも余り急ぐことないとのことで安心する。

しかしこの行軍で右足の靴のかかどが取れ、足に大きな豆ができて、それが一時化膿したが、長距離の追撃

戦も何とか、なしとげられて幸いであった。また、原住民が日の丸の旗を振って我々を歓迎してくれているとき、中沢兵が小豚をみつめて、いたずらのつもりで小石を投げたところ、小豚に当たってコロリとなったので、その子豚をすぐ拾い、我々のチャン馬に乗せて、我が隊員も知らない内に進んで行く。全くこの早業には驚かされた。

仏印東州と中国広西省と国境の町ラオガイに到着する。ようやくひと安心となった。ここで次期作戦命令のあるまで半月余ぐらい休養する。ここは支那大陸よりアメリカの爆撃機が毎日のようにエンジン止め低空飛行で来て、爆撃や機銃掃射で悩まされる。特に夕食時を見計らって毎日のように爆撃、機関銃掃射、火焰放射機などで悩まされるが、我々駐留部隊には余り被害はない。しかし、夕方の夕食時をねらわれるのには閉口する。

あるとき、自分は業務もなく夕方、日没前でもあり兵舎の前で煙草を吸っていた。初年兵（後から入って来ないので皆二年兵になっていた）らが夕食の準備を

して、野戦でも森の外で火をたき煙を上げていたところ、爆音もないのに急に大きな爆撃機が数機現われる。自分は思わず「爆撃だ」といって、近くの者に知らせると同時に前にあつた壕に飛び込む。入ると同時に機銃の弾丸がバリバリと飛んでくる。この場合は普通兵器を持って待避しなければならぬのだが、そんな余裕は全然なく壕に飛び込んでしまった。長い軍隊生活でもこんなことは初めてである。

国境の町では幾度も危険な爆撃を受けたが大した被害もなく、仏支国境は戦争状態ではなかった。しかし、夜に入れば下士官らはこっそり鉄橋を渡り、ラオガイの町へ行き、飲み屋で、川を渡って来て同じ飲み屋に來ている中国の尉官級と筆談で語りながら一時を過ごして楽しんだこともある。これは全戦線においてもほとんど見掛けられなかったことだろうと思われた。

しばらくして我々はラオガイよりニキロほど中へ入った小さな部落に分宿して、次期作戦命令を待つことになる。ここで自分は右足薬指に「ネブツ」ができて、右足すね下が大分腫れ、一人では容易に歩けないよう

になる。それで唐沢衛生兵から、大分時間をかけてネブツの芯をとってもらい、ようやくふくらみもだんだん引いてきたが、歩行はあまりよくできない。

そのとき、急に釣井准尉に呼ばれ、士官学校出の飯屋少尉に「当番兵の宮沢上等兵と共に第六二連隊に帰り、幹部教育隊に行け」といわれ、直ぐその夜、一部の者に見送られ出発、ピンゲン第六二連隊第一中隊に入る。そして、ここでマライ、ジャワの学校へ行けなくなつた幹部候補生、下士官候補生の教育を行うことになつた。

しかし、これも一カ月ぐらいで戦況が悪くなり、後は宣光市に移り、討伐・輜重・警乗などの任務について終戦までを送ることになる。

## 【解 説】

― 明号作戦 仏印の想い出 ―

体験記執筆の吉田氏（第二十一師団歩兵第六十二連隊討四二三四部隊―永安）の想い出は、仏領インド支那現在のベトナムで、昭和二十年、終戦近いとき実施

された「明号作戦」であり、当時既にドイツが連合軍に降伏し、日本一国のみが孤立して太平洋戦をせざるを得なくなつた。

日本軍は、昭和十五年九月仏印に進駐し、大東亜戦争勃発と共に引き続き駐留していた。したがって仏印、タイは今次大戦における我が軍の最も重要な作戦基地であつた。しかし、主権はフランスにあるので我が国はフランスと協定を結んで駐兵権を得て軍事行動を行つたのである。

しかし、戦勢が我が国に有利に進展している間はこれでよかつたが、前述のごとく枢軸国は日本のみとなり、ビルマのインパール作戦の失敗もあり、我が国に對する協力は逐次消極的となつた。

十九年末にフィリピン失陥により、米軍が中国軍と協力して、本土と南方軍の分断を図るため、インド支那半島の直接攻撃が予想され、仏印は大きな危機にさらされた。当時同地には第二十一師団を主力とする兵備がなされていたが、戦備の強化は急務とされるに至つていた。

このころ仏印は、表面的には我が国と友好関係を装つていたが逐次敵性を現わし、仏印の我が軍が攻撃を受けた際、背後から攻撃をされる危険を感じさせた。そのため、連合軍の攻撃に對する仏印防衛の第一段階としてまず仏印軍の武力処理が必要となつた。この作戦を「明号作戦」と呼称したのである。

当時、仏印軍の兵力は九万と判断され、我が駐屯軍の一師団、二独立混成旅団では不十分なため増強が要求された。また短期間にこの敵を処理するためには企図の絶対秘匿と周到な作戦準備が必要であつた。インド支那駐屯軍は昭和十九年末、「第三十八軍」と改称され、逐次戦力は増強された。

昭和二十年二月二十八日、大本營は南方軍総司令官に對して、三月五日以降、武力を行使して仏印を処理することを命じた。第三十八軍は三月上旬作戦準備を概成、三月九日、仏印全土にわたり一斉に武力を行使した。一部の敵を逸したため、掃討に予想以上の日時を要したが、大部は予想どおりに成功した。アンナン、カンボジア、ラオスの三国は相前後して独立を宣言し

た。軍は三国の独立の基礎の固まるまでという条件で、フランスに代わってインド支那の統治を引き継いだ。

仏印軍を処理した第三十八軍は、後顧の憂いなくインド支那の自主的防衛態勢の強化に着手したが、このころペトミンの積極的活動開始により、仏印の統治ないしは治安確保の問題は、ようやく多難になろうとしていた。これが戦後五十年を経た現在でも続いているのである。

体験記「仏印の想い出」は吉田氏の明号作戦参加状況を執筆されているので、解説では作戦計画と実施状況を概説するに止める。

「情勢ノ変化ニ応スル仏印処理ニ関スル件」は昭和二十一年二月一日、最高戦争指導者会議において決定。

## 第一 方針

一、帝国ハ戦局ノ推移並ニ仏印ノ動向ニ鑑ミ、自存自衛ノ絶対ノ必要ニ基キ、仏印ニ対シ機宜自主的ニ武力処理ヲ行フ、武力処理発動時期ハ別ニ之ヲ定ム

二、武力処理発動ノ時期ニ至ル迄ハ厳ニ我企図ノ秘匿ヲ図ル

## 第二 要領

一、武力ヲ発動スルニ先立ち至短時間内ニ外交措置ヲ完了スル如ク、先ツ大使ヲシテ仏印総督ニ対シ左記趣旨ヲ期限付ニテ要求セシム（左記一略）

二、仏印カ全面的ニ我要求ヲ受諾セル場合ニ於テモ仏印軍並ニ武装警察隊ハ再編成ス

三、仏印ニシテ我要求ニ応セサル場合ニ於イテハ、帝国ハ武力ヲ行使シテ仏印ヲ処理シシタリ之ヲ軍ノ管理下ニ置ク

## 四 八 略

注意 一般仏国人、權益等ニ対シテハ努メテ穩健ニ取り扱フモノトス

武力処理準備一兵力の増強

十九年二月独立混成第三十四旅団をインドシナに派遣する。九月独立混成第七十旅団新設、十月十二日同旅団を、十二月十九日在支第三十七師団もそれぞれインド支那駐屯軍の戦闘序列に入れた。十二月二十日インド支那駐屯軍を作戦軍としての性格を明らかにするため第三十八軍と改称。二十年一月以降武力処理決定

後、第二十二師団、第二師団、第四師団の一部が第三十八軍指揮下に入れられた。

### 第三十八軍作戦計画

仏印軍の兵力、配置は次の通りであった

総兵力 約九万（うち仏人と外人部隊に属する者二万人、現地人七万人）

### 配置

北部集団 トンキン州 四・五万名。

中部集団 アンナン・ラオス 一万名。

南部集団 コーチシナ・カンボジア 三・五万名。

右の他約五千名と推定の保安隊。

主な駐屯地

北部集団（ランソン・ハノイ・トン・ハイフォン）

中部集団（ユエ・キニヨン・ナトラン）

南部集団（サイゴン・ブノンペン）

### 装備、訓練の度

装備は小銃、重火器、山砲級で新式のものとの更新なく、近代戦に即応するものとは認められぬ。正規軍を除いては一般に部隊訓練は未熟で、軍紀は厳正

ではなかったが、十九年末ころから夜間訓練、山地踏破訓練、集成部隊の訓練を重視し、戦闘能力の向上に留意していた。

### 海軍

主力をサイゴン、サンジャックに配置

航空兵力 北部インドシナに配置

北部インドシナのランソン、ドンタン、ラカイなどに堅固な要塞を建設、サンジャックなどに旧式砲台があつた。

### 我が軍の兵力部署

北部仏印 第三十七師団 ルージュ川（含まず）以

東のトンキン州処理 第二十一師団 ルージュ川

（含む）以西のトンキン州ハチン以北のアンナン、

ラオスの処理 第二十二師団 北部仏印国境の監

視。

中部仏印 独混第三十四旅団 ナトラン（含む）以

北、ハチン以南のアンナン処理。南部仏印 独混

第七十旅団 コーチシナとナトラン（含まず）

以南のアンナン処理。第二師団（在ビルマ部隊を

除く）カンボジア処理

### 作戦期間

約一カ月のうちに作戦を大体終了することを目途として作戦期間を次の三期に区分

第一期 作戦第一日から第三日まで、主要地域の仏印軍の処理

第二期 作戦第四日から第十日まで 交通要線にある諸都市機関、保安隊占領接收

第三期 作戦第十一日から作戦第三十日まで 奥地に逃亡残存する仏印軍の掃討

三月九日午後十時二十一分

「一、総督は遺憾ながらわが要求を拒絶せり、

二、諸隊は直ちに作戦行動を開始すべし」

と、第三十八軍軍司令官土橋中将は命令し、通信室より「7・7・7」の連続発信を命じた。北部仏印においては午後十時十分（命令の十一分前）一部において攻撃が開始されたことを知り、武力発動を開始した。